

シベリア抑留体験記

愛媛県 小西照男

私は昭和十六（一九四一）年に徴兵検査を受け甲種合格となる。同年十二月には大東亜戦争が始まる。

翌十七年一月徳島県に在る三十三部隊に入隊、一期の検閲三カ月が終ると外地勤務となり、満州、現在の中国牡丹江寧安の独立守備隊で、列車飛行機弾薬庫の警備等で四年間が過ぎた。

ソ連、今のロシアは満州国へ侵入して日本軍の武装解除を行った。

昭和二十年九月四日、我々は冷山駅を後に牡丹江へと向った。ソ連の兵士の監視は付いていない。線路伝いに何日か歩き続けて冷山から拉古へとたどり着いた。ここは日本軍の馬部隊の居た所。九月十日ごろになると満州の地はもう寒い。食べ物が無いのでトウモロコシを取りに行くのだが満人

が銃を持って監視しているのでソ連兵に助けを求め、少しずつ持って帰って食す。こんな日々が数十日続いた。その間ソ連軍は日本軍の武器及び銃類すべて、軍人の官舎の屋根のトタンに至るまで本国へ運んで、日本の兵隊には中国の食料を与えて、最後に日本兵をシベリアに送って労働力とした。九月の末ごろだと記憶に残っている。日本兵は日本へ帰すから汽車に乗るよう言われ、汽車に乗る。その汽車は貨車でストープが取り付けてある。また冬物の満服が積んである。ソ連人はウソばかり言うので帰れるとは思っていない。なかなか出発しない。夜暗くなつて汽車はようやく動き始め、東へ東へと進む。目を覚ますと綏芬河、一回前に来たことがある。もうすぐソ連領である。我々を乗せて列車は夜しか走らない。東の空が白みかけたころ海が見えてきた。ウラジオストックに着いたんだと皆喜んだのも束の間、ハバロフスクとの勘違いで皆がっかりした。汽車は夜だけ北へ北へと進み、幾晩か走った。一望千里草原で、

シベリア独特の白い月が霜の草原を照らしている。何年ソ連に抑留されるのだろうか、心細くなって、皆口数も少なくなる。九月の末か十月の始めごろだったと思う、シベリア本線を西へ進んで、今度は支線を北へ向かう分岐点イズベストコーワヤ（石灰の町）を北へ進む。夕方暗くなったところで下車。ここからは路線は有るがレールが無い。後から聞いた話だが独ソ（ドイツソ連）戦でレールを引き上げたらしい、いかに戦いが苦しかったか思い知る事ができる。寒さは厳しくなり、腹は減ってきた。おまけに粉雪が降ってきた。いよいよこれからは何年とも知れない収容所生活の第一日目である。ドイツ兵の収容された所で、少し明かりが見えた。ソ連人が我々に与える食事を作っている。

粉雪の降る向こうで、炊事の湯気が立ち込めているけれど、寒空で何か冷たく感じる。小さな缶詰の缶に一杯の粟のスープが夕食だ。終わるとまた移動で、四、五キロ歩いただろうか、百人ぐら

いは入れる収容所に着いた。寒々しくガランとした四十人ぐらい収容出来る部屋で、ストーブだけはあるけれど火は入っていない。

小さなランプが二つあるだけ、寝具も何も無い。木製で取り付けた二段ベッド、疲れているので横になるけれど寒くて眠れない。翌日からは我々の生活する薪作り、日本人が出られないようにする柵作り、高い望楼からはソ連の兵隊が昼夜を問わず監視している。

一カ月も経たないのにまた移動命令で奥地へ向う。ソ連兵に連れられレールの無い線路伝いに弱った体で歩く。枕木一つずつ歩くと小股、二つずつ歩くと大股になる。それでも人に付いて行かないとソ連兵に銃で殴られる。夜は昔、畜舎（馬小屋）のような所で一夜を過ごすのであるが、寒くて眠ることができない。戦友と背中を合わせて暖を取る。古ぼけた収容所にたどり着いた。また前と同じ作業をする。大体片付くと今度は材木の切り出し、搬出の作業と、本格的な作業でも腹半分

の食事が毎日続く。

シベリアももう厳寒で、積雪のため輸送は途絶え食糧が無くなる。一日一人当り馬鈴薯小さいのが二つか三つくらい。それも無くなって三日間何も食べない。ようやくトラック輸送ができ、大豆が少し入荷した。一週間くらい大豆のスープの飯を食っていたら足がくたくたになってきた。

三十歳以上ぐらいの人は栄養失調になる率が多いように思われた。始めは痩せ細っているが死亡前は足が太く腫れる。

ソ連はノルマが特に厳しい、個人個人の作業量は健診によって実績が決まる。一級から四級まであって毎月の診察があるが抑留者の診察はいたって簡単で、腕の皮膚を引っ張ってみて皮が多く引きあがれば三級とか四級に決まる。一級の体になつたら一〇〇%の仕事をしないと一〇〇%の食事は与えられない。二級の人は八〇%の仕事で一〇〇%の食事ができる。

半年くらいたったであろうか、また奥地へと移

動した。鉄道線路の土面を作るための穴を掘って、ダイナマイトで爆破する作業で、一メートル掘ると下は凍って掘る事が出来ない。一メートルの角で深さ五十センチのノルマであるが、二、三日はできるが後は土が凍っていて掘れない。慣れてからは夕方、立ち枯れの木を切つて来て、穴の上で火を炊いて帰る。

翌日は氷が溶けて少しは作業が楽になる。

どこの収容所も同じであるが地獄の鐘がある。それは線路に使つてあつたレールを一メートルくらいに切つて吊り下げて、木の槌で打つとガンガンと鳴る。作業整列に鳴らすので地獄の鐘と名づけている。

零下三〇度以下になれば作業は休みであるが、朝、日の出前が一番寒く、一時間もすれば温度は上がつて来るので作業整列の鐘が鳴る。

風はあまり無いが少しでも風があると鼻の頭がローソクのように白くなって凍傷になるので、いつも手の先、鼻の先、耳には気をつける。

色々な作業をしてきた。鉄道線路の土盛、大工、左官、土方、何回収容所を変ったことか。抑留されてもう二年近くになった。体が痩せて三級に下った。また北の方角に当る奥地、地図も何もないので何も分からないが、大きな農場へ行かされて、農場と言っても寒いので馬鈴薯くらいしか作れない。農作業をしていたがソ連のカマンジル上の役から消防隊の方へ入れと言われ、約六カ月務めたので命が長らえたように思う。

秋になると南の空へ向って雁が飛んで行く、鳥になつたらと思う。冬になって来ると今年、身体が持ちこたえられるかな……。白樺の肥やしになるような気がしてならない。夏は日が長く、真っ暗になるのは二、三時間だけ。冬はその反対で夜が長い。話と言つたら日本へ帰る事と食べ物の話、腹いっぱい食つたらいつ死んでもよいと思う。夜は赤の教育、このころは食べ物の話でもしたら反動分子だと言われた。

食事をする所へハガキくらいの大きさの紙に天

皇制の悪いところをマンガ風に書いたり、また壁新聞に出してもらうようになったら日本に帰れるのが早い。その外にハラシヨウラポーター仕事をする者、また体が弱い四級くらいの者。

今まで書いているのは三年間の一部分である。抑留三年目の春が来て初夏が訪れた。弱った身体もようやく春を迎える。食える物は何でも食った、蛙、蛇、ねずみ。蛙の卵、カンテンのようなもの、蛙の卵だけは食べられない。

今度は大きな収容所へ変わった。三百人くらいの収容、そこで二カ月くらい作業をした。

ある日、ソ連の幹部に呼ばれ、日本の通訳を通して、近い内日本に帰すと言われた。呼ばれた者は三百人の中から五人である。半信半疑であった。通訳によれば共産主義を良く学んだから帰すと言う。翌日ソ連兵に連れられ汽車に乗る。我々が歩いて来た路線は日本人の手によって汽車が走るようになってきている。建物も大分建っている。シベリア鉄道本線に当る中間の収容所で新しい靴、また

上下服を支給され一泊した。

また汽車でイズベストコーワヤへ来る時に第一歩を踏んだ所を通ってシベリア本線テルマを通して夜だけしか走らない列車がようやくナホトカに着いた。最初の収容所では体の検査、持ち物、主義、本人の性格。そこを終わって次の収容所では何も持たせない。メモ帳、写真、紙一枚も日本へ持って帰る事はできない。もし持っていたらいつ帰れるか知れない。

いよいよ最後の収容所へ向う、ここではソ連の将校から別れの挨拶があった。

航海中の無事を祈ることと共産主義を守って日本のためになるよう日本語で挨拶があった。一人一人アルファベット順に名前を呼び上げて、柵の前に並ぶ。労働歌を歌いながら小高い丘を越えてナホトカ港に向かう。客船が三隻（外の二隻はソ連の客船）、一隻は古ぼけた日の丸の旗が見え、いよいよ乗船が始まった。またアルファベットで名前が呼ばれるとソ連の大地を逃げるようにして

乗船した。船にはソ連の将校が乗っている。これでは日本へは帰れない、今度は樺太の方へ連れて行かれるのではないかと思った。出航した、ソ連の将校はモーターボートが来てナホトカへ帰って行った。

日本の船員に聞いたら舞鶴に入港するとの事、安心した。船は南へ南へと進んでいる。乗船して三日目の朝方だったと思う、うっすらと島影が見え始めた。島に近付くと台風の後か風に仕上がっている。

いよいよ日本だ、舞鶴港に着くと婦人の方々の出迎えがあった。何年目に見た日本人の女性は小さく見えた。援護局の事務所へ行ってみたら県別の手紙が入れている。

その入れ物の中に私宛の手紙が一通あった。みづる姉からの便、義理の兄も軍人、二人共満州から帰っている。

ここ東舞鶴では色々な検査、衣服の消毒、日本へ帰った手続き、三日間かかった。

シベリアの冬は寒いと言うより痛い

零下三〇度から四〇度になる

九月の始めごろになるともう氷が張る

今年で三回目の冬に入った

今年の冬も元気で越せるかな……

白樺林の肥やしになるのではと

この手この足凍傷にもならず健在で

シベリアの地まで来られた親からもらった自分の体をじっと見つめる

初秋になると雁が南の空へ飛んで行く鳥になりたい

必ず祖国日本へ帰るんだ一時も忘れたことは無い、皆思いは同じである

帰って分かったことだが私は軍隊で四年、この間、普通文通はしていた、シベリアの三年間は文通せよと言われ何十回もしていたが一通も我が家へは着いていなかった

母は私がシベリアから早く帰れるようにと二キロ以上もある御大師様へ裸足参りを続けてくれた

ようだ。有り難く感謝している。

昭和二十三年九月十七日 舞鶴入港

九月二十一日 自宅着

【執筆者の紹介】

愛媛県東宇和郡土居村で出生

地元の小学校、高等小学校及び青年学校を卒業

実家の家業 農業を現役入隊まで手伝う

昭和十七年四月満州第一六六二部隊に入隊、昭

和二十年九月武装解除

昭和二十年九月から二十三年九月までテルマ、

イズベストコーワヤにて労働三カ年。舞鶴にて復

員

帰国後は農協職員として停年まで勤務

現在は悠々自適、のんびりと暮らしている

(愛媛県 山本 繁夫)